令和７年度根本正顕彰会「根本正ゆかりの地を訪ねる旅」（報告）

期　日　　９月２８日（日）
参加者　　１９名　　トキワトラベル交通バス
ルート　　那珂市中央公民館（８時３０分出発）　―　村松の晴嵐　―　ナキビチ山　―
　　水門の帰帆　―　華蔵院常陸山建立の海難事故供養碑　―　昼食（大洗海岸）　―
　　岩船の夕照　―　青柳の夜雨　―　中央公民館（１５時３０分帰着）

根本正ゆかりの地と水戸藩主斉昭公が家臣の心身の鍛錬を含めて選定した「水戸八景」とを組み合わせて、水戸学を学んだ根本正先生の心根を訪ねる旅でした。

「村松の晴嵐」の碑が建つ海岸の砂防林、海辺の村が全滅するほどの海風の害を防がねばとの強い決意の表れです・

華蔵院境内の横綱常陸山建立「海難事故遭難者供養碑」、これは高層気象観測所創設の建議の原点でした。横綱の品格とは何かを考えさせられました。

「青柳の夜雨」碑の背後には、鹿島香取神社があります。ここは、根本正が少年時代に神官の小川伊織や佐川伊予之助に学んだところです。少年時代は、「人間の生き方」をしっかりと学ぶべきです。

今回巡った箇所すべてに、根本正の「学びへの姿勢」「国民への慈愛」「将来への備え」の姿勢が溢れ出ており、それを体感することが出来ました。一人ひとりが「根本正先生の心」を活かした過ごし方を為していきたいものです。

なお、特筆しておきます。多くのところは、おおむね環境保全が為されていましたが、「青柳の夜雨」の建碑周辺は、少し前に訪ねた際には、鬱蒼とした雑草に覆われ、碑は隠れるほどでした。ところが、青柳の大樹の下に、くっきりと緑泥岩の碑が現れていました。前日の猛暑の中、根本正治副会長が綺麗に刈り払っておいて下さったのです。これこそ陰徳、根本正先生の心根の継承であると感じ入りました。

「村松の晴嵐」

東海村のボランティアの方が、碑の周囲の草取りをしていたことに驚きました。そこまでやるのかの感じでした。

快く案内もしていただきました。

この後、松枯れが進む砂防林の現状を確認しました。

「ナキビチ山」

海難事故の遺族の救済事業として、砂防林造成を兼ねて松苗を植樹。
悲しみをこらえるも、泣きながら、涙を流しながらの植樹作業と云われています。
　左の白い建屋の後方一帯の山です。バスは現地まで行けないので、往時を偲びながら仰ぎ、眺めました。

「水門の帰帆」

　太平洋を一望できる和田岬の先端。かつては海防陣屋も置かれ、緊張感漂う所でもありました。
　ここから海運や漁を終えて帰帆する帆掛け船と海の青さのコントラストは絶景であったかと思います。湊の賑わいを彷彿とさせてくれる名所です。

華蔵院墓地内「白土松吉翁の墓」

那珂市名誉市民となったサツマイモの神様白土松吉翁の墓に合掌。
　食糧難を救わねばとの一心から栽培の改良に努めた翁。その延長上に今日隆盛の干し芋生産があります。

華蔵院境内「横綱常陸山建立の海難事故遭難者供養碑」

遺族救済のため相撲界を挙げて勧進相撲を興行。益金は遺家族と供養のために。郷里を思う横綱の真心に感歎です。

この事故対策には高層気象観測所の創設をと訴えた代議士根本正の決意を想起させます。

「岩船の夕照」

那珂川と涸沼川の合流地点、ここは川の流れの優しさと合流の美しさ、対岸の湊の賑わい、そして西の彼方遥かに筑波山の峰々を遠望。自然美が集中した名所です。

この周辺で、幕末に天狗諸生の騒乱が展開されたことなどを忘れさせてくれるほどの絶景です。

「青柳の夜雨」

那珂川に夜船を浮かべて観る柳か、柳の並木から川面に浮かぶ灯を眺めるか。

碑をよけての築堤に、関係者の歴史愛を感じます。

以上

令和７年度　根本正顕彰会「ゆかりの地を訪ねる旅」

９月２８日（日）　根本正顕彰会

根本正ゆかりの地（村松砂防林、ナキビチ山、華蔵院）と水戸八景（村松晴嵐・水門帰帆・巌船夕照・青柳夜雨）

ご多用の中、根本正顕彰会恒例の「ゆかりの地を訪ねる旅」にご参加いただき、ありがとうございます。

今年は、東海村、ひたちなか市、大洗町、水戸市の歴史的名所を巡ります。

ナキビチ山、華蔵院には、根本正が高層気象観測に尽力する原点となった海難事故関連の史跡があり、特に、華蔵院は、歴史好きには興味ある史跡の宝庫でもあります。村松晴嵐の近くには、日本に於ける本格的砂防林造成の規範となったクロマツ林があります。この実現にも根本正は大きな貢献をしました。

水戸八景は、徳川斉昭公が、領内の８つの景勝地を選定したもので、藩内の子弟に八景巡りを勧めて、自然観賞と健脚鍛錬とを図る目的がありました。青柳夜雨（あおやぎのやう）、太田落雁（おおたのらくがん）、山寺晩鐘（やまでらのばんしょう）、村松晴嵐（むらまつのせいらん）、水門帰帆（みなとのきはん）、巌船夕照（いわふねのゆうしょう）、広浦秋月（ひろうらのしゅうげつ）、仙湖暮雪（せんこのぼせつ）を徒歩一日で巡ったのです。本日は、４カ所を見学します。

安全で楽しく有意義な旅になるようご協力をお願いします。

主な日程等は下記の通りです。

記

１　日　時　９月２８日（日）　午前８時３０分～午後３時５０分

２　日　程（予定）

○　出発　８：３０

①　村松晴嵐（むらまつのせいらん）、砂防林　９：００～９：４０

②　ナキビチ山　１０：１０～１０：３０

③　水門帰帆（みなとのきはん）　１０：５０～１１：２５

④　華蔵院（けぞういん）　１１：４０～１２：１０

○　昼食（大洗海岸にてお弁当）１２：２０～１３：１０

⑤　巌船夕照（いわふねのゆうしょう）　１３：２０～１４：００

⑥　青柳夜雨（あおやぎのやう）　１４：４０～１５：２０

○　帰着　１５：５０

＊時間や体力等の関係で、一部、変更するところもあるかもしれません。

○　交通機関　観光バス（トキワトラベル）

水戸八景めぐり（烈公の教育）

1　水戸八景設定の背景

（1）**徳川斉昭**　俗称 敬三郎　名は紀教　字は叔寛　烈公と称す **「敬」**の一字常に心にあり。器物には**「政」**の記号　「政」字心を離れず　政は「正」なり、正にして文なければ則ち剛毅木訥に近し。文にして正なければ、則ち巧言令色に近し。正文相接して以て「政」の字を為す。（文化１３年夏「日省録序」）

天に日月有り、地に山川有り、万物を曲成して遺さず。禽獣草木、各々其の性命を保つものは、一陰一陽其の道を成し、一寒一暑其の宜きを得るを以てなり。諸れを弓馬に譬ふ。弓に**一張一弛**ありて、恒に勁く、馬に一馳一息ありて、恒に健やかなり。弓に一弛なければ、則ち必ず撓み、馬に一息なければ、則ち必ず殪る。是れ自然の勢なり。

夫れ人は万物の霊にして、其の或は君子となり、或は小人となる所以のものは何ぞや。其の心の存すると存ぜざるとに在るのみ。・・・・人もまた弛息なかるべからざるは固よりなり。（その修養のあり方に弛息がある。必ずその花晨に吟詠し、月夕に飲宴する者は文を学ぶの余なり。鷹を田野に放ち、獣を山谷に駆る者は、講武の暇なり。　（天保１０年「偕楽園記」）

（2）**烈公の初就藩**（天保４年３月５日）　**湊御殿**へしばしば宿泊

「若き衆中文武共に相励み申さず候由聞き及び候に付き、何れにも御引き立て成り度候間、存意候はば申し上げ候」

3/10 瑞龍参拝　杉山 ― 青柳 ― 菅谷横須賀勘兵衛宅 ― 向山浄鑑院 ― 額田鈴木市十郎宅膳所 ― 墓参 ― 太田浄光寺泊

3/11 西山荘 ― 太田蓮華寺 ― 稲木久昌寺 ― 田彦村庄屋与兵衛宅 ― 枝川 ―（舟行）― 杉山 ― 帰城

5/2・6/26　村松大神宮参拝直ちに湊御殿へ　7/4 湊柏原明神参拝

8/17　伊勢畑筋巡村　8/21～29 北浜筋巡村（玉簾寺・枕石寺）

５年3/16 南郡巡村　3/27 武茂郡巡村　瓜連 ― 山方 ― 鷲子 ― 大子 ― 袋田 ― 天下野 ― 大方 ― 小島

⑶ **選定・建碑時期**

・藤田東湖「天保四年江戸に在りける頃、殿より八景の詩歌めされりとて、水戸の史臣等の物しけるを云々」

「四月朔、公駕彰考館に臨み、館僚に経を講ぜしむ。又酒肴を賜ひ、親く常**陸八景**の題を出し、詩歌を募る」

・僧日華（江戸駒込大乗寺・久昌寺）の選定案

・長島尉信の水戸八景めぐり（天保六年春建碑説）　〈近江八景は室町時代後期制定か〉

2　烈公の教育観

① 我等抔は、三ツ四ツの節より文公お供にて毎朝々々面白くもこれ無き寒さに御庭のお供いたし、武公の御世にも同様毎寒中御鷹に相成候へは、御灯燈にて入らせられ夜も又灯燈にて御帰りに相成、手も足も皆ひびにて血流れ申し候を、足洗い候節あかすりにてむしり取り候へき。耳抔は霜やけにて絶えず血のみ出候へき。鶴千代抔も寒く相成り候はば、朝は七ツ頃より起き候て水にて顔洗ひ、入り側の障子抔あけ、顔へ風のつんつんと当たり候所にて、大声にて四書にてもよみ、少々空白みがかり候はば、直に鷹に出従ひ、鷹合せ申さざる日たりとも、一廻り庭を廻り帰り候て食事にても致し、書物なり剣術なり致し候のよろしく候。炬燵抔へくぐり込み居り候様にては、迚も用に立ち候人には相成り難く候云々。

② 庶子は嫡子と異りて、養子に望む家あらば直に遣わすべきものなれば、永く我が膝下に教育し難し、されば文武共に怠らしむべからず。若し他家に出し遣る時、柔弱にして文武の心得なくば、我が水戸家の名を辱しむる事あるべし。水術・弓術・馬術の三科は並に修行せしむべし、中にも馬術は馬場にて乗るのみにては何の用にも立たず、坂を乗り廻らんために、度々好文亭の辺、仙波のあたりを廻るべし。湊などへも、手軽に付の者共と遠馬に出づるよう扱うべし、但し子供はじめ腰弁当たるべし。

烈公作「水戸八景」

文字　隷書装飾体　＝　幹隷又は八分　⇒　水戸八分

装飾隷書　＝　古典文字　夜、山、太、村、帆、夕、月、莫

雨夜更に遊ぶ青柳の頭「**青柳夜雨**」（**濡れ石、自然石**）

青柳の津を越え鹿島明神左へ入る。川根南に向かい建つ。南は杉山中山殿邸、三の丸、舜水堂、八幡森・祇園の森。

山寺の晩鐘幽壑に響き「**山寺晩鐘**」（**寒水石；ｃｆ「吐玉泉」**）

徳川光圀　久昌寺建立（元禄五～六年）　三昧堂檀林（講堂・板頭寮・玄義寮・妙見堂など）　朝夕に峰の松風ききなれて近くおどろく波の音哉

日乗上人（久昌寺住職）

西山の眺望は奥無窮　地勢天然は洛中に似たり　田渡の嶺は将軍頂の如く
高鈴の嶺は是れ四明峰　稲木を旋れば嵯峨と比し　精舎全く兼ね衣笠に同じ
君若し都下の美を看るを要せば　常陽城の北太田の東なり

徳川斉昭

山の寺なる三昧てふ堂の庭の前より青うな原を見渡して
大舟のともつなへつなときはなち千島をさして行かまく思ほゆ

＊ 天保十四年十月檀林破却の命

雪村の碑

檀林妙見堂跡（横山大観揮毫、昭和十九年建立）

太田の落雁芳州を渡る「**太田落雁**」（**花崗岩、御影石**）

太田御殿（宝永四年十月中山備前守信敏屋敷構え、文化元年焼失、天保十三年再建、弘化元年鐘楼）　歴代藩主の宿舎　　湧水「お茶の水」（観蔵井）　太田七井の一つ

太田七井（紫岸井・猿の井・金が井・十王井・下井・滝の井）

遥に望む村松晴嵐の後「**村松晴嵐**」（**濡れ石、自然石**）

会沢正志斎宛藤田東湖書簡抄（弘道館の祭祀について、天保８、９、２８）

扨、可笑事一ツ御座候。最初御議論申上げ候節、九五（烈公）の御主意は兎角天祖神武を御祀りの御主意にて、村松又は湊の柏原明神等に御気有之候ゆへ、非礼之段申上げ、兼々貴説にて承知仕り候通り、段々順々に天祖神武帝にも通じ候意味申上げ、是はとうとう十分に御呑込みに罷成り候。

水門の帰帆高楼に映ず「**水門帰帆**」（**寒水石**）

東廻海運の寄港地、仲継地　涸沼川 ― 海老沢 ― （陸送） ― 巴川 ― 北浦 ―

利根川 ― 関宿 ― 江戸川（松戸川）

廻船・海産物問屋　白土・木内・大内（献金郷士）・近藤（献金郷士）

海防・異国船番所　光圀の快風丸蝦夷地渡航、郡奉行吉成又右衛門仲介大内清衛門

北地偵察　寅賓閣　　開宴賞月　戯賦

山蝉聲発して雨初めて晴れ　　寅賓閣中涼気生ず

尤も喜ぶ今宵雅客を迎へ　　文波月に湧いて詩情を促すを

霞光爛漫たり岩船の夕「**巖船夕照**」（**花崗岩、御影石**）

「者楽亭」阯　願入寺の裏より。　　那珂川・涸沼川の合流点

月色玲瓏たり廣浦の秋「**廣浦秋月**」（**粘板岩、自然石**）　烈公　　舟中聴楽

舟を廣浦に浮べて仙楽を聞く　　鐘鼓管絃晩涛に混ず

君子人を愛す眞に慕ふべし　　鶏を割くに牛刀を用ふるを笑ふなかれ

小宮山楓軒（南郡奉行）の治政

紅葉陣屋　２０年 博徒禁止など気風の刷新・間引き禁止と育子の徹底・

クヌギ植樹（換金策）

藤田東湖の烈公諫言

（家老の言を容れ）一度召して議論を聞きたるに何事も姑息にて有為の念なし。

度々召候ても益なしとの御事故、小宮山は一国の老成にて人望の帰する所なり、その学術人物議すべきものなきにあらずといへども、江水信用する所なり。されば これを疎んじ玉ひ、執政らの望を失ひ遊ばれんよりは、少しく顔色をかし玉ひ、議論を尽くさせ玉ふも亦人君の御職なるべし。

雪時嘗て賞す仙湖の景「**僊湖暮雪**」　（硬質凝灰岩？）

七面明神の東、湖面に向い建つ。その辺に梅樹仕立てる。（長島）

石工　　太内家二代　石了利兵衛（天保１１年歿）

天保５年、仙洞御所へ献上の雪見灯篭建造　⇒　水戸藩御用石工

三代石可　　明治７年歿

磯崎酒列神社境内の道標（万延元年作）

※　観濤所　（ひたちなか市平磯、護摩段前台地上）

烈公　水戸藩の彫金家海野美盛が波の千鳥の鍔の構図に感歎、実写か？

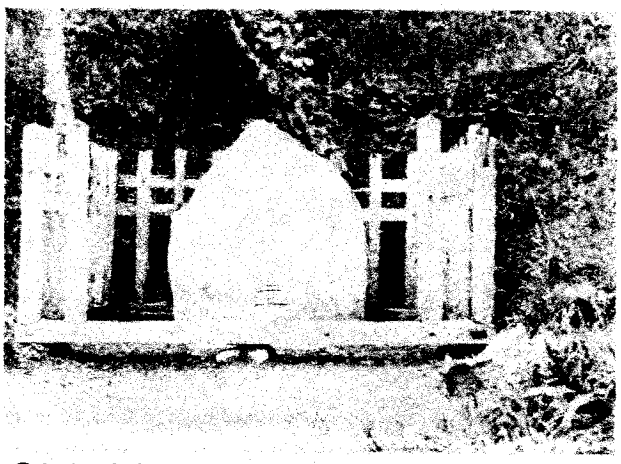
平磯・磯崎海岸と応答　⇒　「聞きしにまさる波の景観なり」

① 青柳夜雨

②太田落雁

③廣浦秋月

④僊湖暮雪



⑤山寺晩鐘

⑥村松晴嵐

⑦水門歸帆

⑧巖船夕照

三浜貧民譚（佐藤次男氏）１９７５年　月刊東風３月号より抜粋

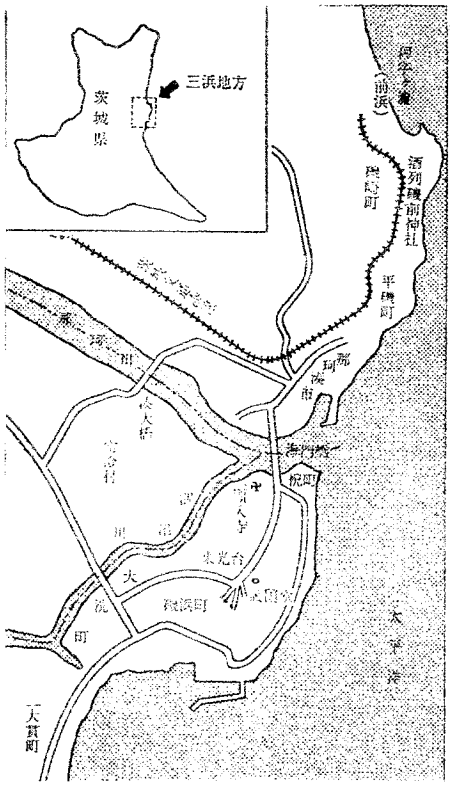
著者：佐藤次男氏　元茨城県郷土文化研究会副会長

根本正生誕150周年記念シンポジウムパネリスト

漁船の遭難も度々ありましたが、わけても大暴風雪による明治４３年３月１２日のそれは、古今未曾有といわれるもので、茨城県では死亡５５６人内湊１０７人、前浜３８人、平磯は実に２６８人の被害を受けております。とくに平磯町では、遭難者戸数２６３戸、遺家族１２９２人に及び、３歳未満の遺族５２人、寡婦１５５人を生じ、親子・兄弟・叔父・甥など同時に失った者２１家族、一家２名死亡１５戸、一家３名死亡２戸があり、生活が苦しくなったり、困難になった人員は１，０５３人に及んでおります。

漁船の大遭難（明治４３年）―遺家族の追憶―

ナキビチ山け…。あれは坊主山だったのを明治４５年に、松苗を植えるのに役場で遭難者のゴケさんや家族に、一日いくらでやらせたもので、三日か四日位べんとうを持って通った。みんなで泣きながら苗を植えたもんで、それからナキビチ山というようになったんだ（ナキビチ山は、平磯町三ツ塚辺の松山のところである。）



第19代横綱常陸山の追善供養相撲興行

明治43年3月12日午前 突然の大暴風雪により那珂湊沖で未曾有の漁船大遭難。沖合遠くのマグロ流し網漁の最中。当時、平磯町のマグロ流し網漁業は全国一であった。

【被 害】　　遭難 漁船　　65艘

（船体行方不明・漂着の損害 28 艘）

遭難乗組員　1117人

（死亡・行方不明　437人）

【遺家族など】 398戸、1993人、 3才未満の遺族52人、　寡婦155人

親子・兄弟・叔父・甥など同時に失う 21家族、1家で2名の死亡 19戸、3名は2戸

【遭難の原因】

① 櫓漕ぎと風力帆走船　② 板張式漁船　③ 小規模漁港

④ 気象予知不足＝高層気象観測所の必要性を認識させられた

明治44年（1911）湊町海岸で3日間の興業、遺家族を無料招待。収益金は遺家族の救済と「遭難漁民追薦之碑」建立にあてた。

遭難漁民追薦之碑　（那珂湊華蔵院境内）

明治四十三年三月十二日、千葉・茨城二県の海上颶風猝（にわか）に起こり、雨雪交（こもご）も至る。漁民の凍死溺没は千に垂（たんたん）とす。その貫籍、茨城県磯崎に属する者十六人、前浜に属する者四十人、湊街に属する者一百七人、平磯に属する者二百七十六人、総計四百三十九人。当時報を聞きて官民救に赴くも、その生を全うし、屍を収むる者僅々十の二、三に過ぎず。蓋し風力強暴、寒威凛烈にして舟楫の進退意の如くなる能わず、故に以て死する者甚だ多し。二十七日湊街殿山に合葬す。老幼婦女の慟哭哀声、月を踰えて絶えず。その状最も凄惨たり。県人常陸山角觝（かくてい）班中の巨擘なり。人と為りは剛毅・任侠を好む。少時は水戸中学において学ぶ。平生書生の来りて窮を告ぐる者あれば、則ち資を給してその志を成す。漁民の遭難を聞くに及び、死を弔い生を救わんと欲して未だ暇あらざるなり。今茲に一週忌辰、同士の者と謀り、死者の追薦を標榜す。いわゆる勧進相撲を湊街に開帳し、その遺族を招請して縦観せり。四方より伝聞せる観客雲集す。かくの如くすること三日、千金を立ちどころに弁ず。常陸すなわちその一半をもって寡孤を恤（すく）うに存し、一半を碑を樹て死者の為に冥福を修し、もってその志を遂ぐ。その角力の技は、中古防人の常職、もって講武の一と為すも、近世以降変じて遊技の技と為る。これにおいて抜山の力、屠竜（とりゅう）の術も徒（いたず）らに場中に跳躍するのみ。辺警ありと雖も、復た用うる所なし。然りと雖も時に傑出する者あり。善くその力を転じ、巨資を公私の間に捐て、もって政教の及

ばざる所を補う。常陸のごときに及ばず。此の挙すなわち是れが故なり。余喜びてその顛末を誌すこと是の如し

正五位勲四等ドクトル　尺　秀三郎撰

第十九代横綱　　常陸山谷右衛門書

水門　東海大内石重鐫

（裏面）　勧進元　花田　六助

石井長次郎　　川崎　元吉

根本安之助　　石丸　七郎

東京角力目代　　益子　薫　　華蔵院純亮代

（平成２７年　華蔵院境内海難供養碑の前で）

水戸八景

徳川斉昭が提唱した茨城の絶景ベスト８

徳川斉昭は１８３３年（天保４年）に水戸の景勝地のうち「水戸八景」として以下の八ヶ所を選定しました。北宋の士大夫である宋迪が創始した瀟湘八景に倣って選ばれたと言われており、徳川斉昭が自ら来訪したり、士民たちから募ったものから厳選したとされています。景勝地の場所には斉昭自筆の銘を刻んだ碑が置かれており、石碑自体が重要な史跡となっています。

・青柳夜雨（あおやぎのやう）
　碑のある場所：水戸市青柳町、鹿島香取神社境内南の那珂川堤防の柳の木の下

・太田落雁（おおたのらくがん）
　碑のある場所：常陸太田市栄町、東崖の展望台。

・山寺晩鐘（やまでらのばんしょう）
　碑のある場所：常陸太田市稲木、西山研修所内東端。

・村松晴嵐（むらまつのせいらん）
　碑のある場所：那珂郡東海村村松、村松虚空蔵尊裏手の砂丘。

・水門帰帆（みなとのきはん）
　碑のある場所：ひたちなか市和田町、ひたちなか市役所那珂湊総合支所（旧那珂湊市役所）裏手。

・巌船夕照（いわふねのゆうしょう、いわふねのせきしょう）
　碑のある場所：東茨城郡大洗町祝町、願入寺裏の西側。

・広浦秋月（ひろうらのしゅうげつ）
　碑のある場所：東茨城郡茨城町下石崎涸沼湖畔キャンプ場湖岸。

・ 僊湖暮雪（せんこのぼせつ）
　碑のある場所：水戸市常磐町、偕楽園南崖。

青柳夜雨 →太田落雁→山寺晩鐘 →村松晴嵐→水門帰帆→巌船夕照→広浦秋月→僊湖暮雪の順路で回るとされ、全長 100km になる経路となっています。ちょうど水戸市から茨城県をぐるりと回って水戸に帰ってくるという順路になっています。徳川斉昭はこれらの景勝地をただ楽しむだけでなく、藩士たちに歩き巡らせて、藩士の体力向上の意図があったと伝えられています。

徳川斉昭とその家臣は水戸八景を題材に漢詩や和歌を作っており、特に徳川斉昭自ら作った七言律詩の漢詩『水戸八景』が有名です。

水戸八景の位置
1 青柳夜雨
2 太田落雁
3 山寺晩鐘
4 村松晴嵐
5 水門帰帆
6 巌船夕照
7 広浦秋月
8 僊湖暮雪

雪時嘗賞仙湖景（雪時嘗て賞す仙湖の景）
雨夜更遊青柳頭（雨夜更に遊ぶ青柳の頭）
山寺晩鐘響幽壑（山寺の晩鐘は幽壑に響き）
太田落雁渡芳洲（太田の落雁は芳洲を渡る）
霞光爛漫岩船夕（霞光爛漫たり岩船の夕）
月色玲瓏廣浦秋（月色玲瓏たり廣浦の秋）
遥望村松晴嵐後（遥かに望む村松晴嵐の後）
水門帰帆映高楼（水門の帰帆は高楼に映ず）

ただし、これらの中で水戸市内にあるのが二箇所しかないため水戸市では、新たに水戸の景勝地として「新水戸八景」を提唱しています。